琉球大学学術リポジトリ

沖縄人と米人の服色嗜好に関する一考察　第2報　肌色・体格・年代による

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学農家政工学部
	公開日: 2011-04-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 比嘉, 美佐子, 村田, 治子, Higa, Misako, Murata, Haruko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19448

沖縄人と米人の服色嗜好に関する一考察　第2報

肌色・体格・年代による

比嘉美佐子*・村田治子*

Misako HIGA and Haruko MURATA: Color preference in clothing among Okinawan and American women. II. Choice of clothing related to skin color, physique and age.

I 緒　　言

異なる職業および人種による着用色の嗜好に関する研究を第1報[1]で報告したが，今回は肌色・体格・年代の違いによる着用色の傾向について検討することにした。

黄色系の肌を持つ東洋人の一般的特徴と思われるが，沖縄の女性は自己の肌色について劣等感情を持っていて服色を選択する際に，肌色をいくらかでも白く見せたいという意識が作用しているのが屢々見受けられる。またそれとは別に，色には膨脹性・収縮性の差異があるので，体格のタイプ（肥痩度）も服色の選定においては一因をなしていることが予想される。そこで，それぞれの色の持つ特徴をどの程度，肌色や体格に適合させて着用しているかその実態を把握することが本調査の第一の目的である。さらに年令も着用色を制限すると一般に考えられているが，年代の相違と着用色の傾向との相関々係をみることを第二の目的とした。

最後に先の調査（第1報）は夏季に実施されたのに対し今回のは冬季に実施されているので，服色その他に現われた一般的季節の差を検討した。なお，資料の分析には主として相関法と x^2 検定を使用した。

II 調 査 方 法

1) 調査対象　調査対象を今回は20代と30代* に制限し，制服・事務服・コート類・ズボンなどを除き，上・下衣の組合せとワンピースの着用者を 3-5 m の距離範囲を歩行する対象に制限した。調査人員は沖縄人の 20 代総数 354 人で1日平均 70.8 人，30 代総数 375 人で1日平均71.4人である。米人の 20 代総数 396.5 人で 1 日平均 79.3 人，30 代総数 296.5 人で1日平均 59.3 人となっている。

2) 調査期間と調査場所　調査は1962年12月17・18・19・20・21 の5日間に実施され，時間は午後2-4時の間に行なった。調査場所は沖縄人は那覇市の平和通り1商店前，米人は P・X 入口で実施した。

3) 調査用紙と調査員　記入用紙は筆者が先の調査（第1報参照）で用いたものとルイス・チェスキンの色円板を参考にして，体格別（痩型・標準型・肥満型）と肌色別[3]（ピンク系・オレンヂ系・イエロー系）および年代別に記入できる用紙を作成した。

* 琉球大学農家政工学部家政学科

** 20 代と 30 代の分類は，調査員1グループ3名の調整された意見に基づいてなされた。なお，50名を対象に直接調査対象に年代を確かめながら，予備調査を実施した。

調査員は調査前にBroca法[4]による体格の分類，および肌色と年代の見分けに関する訓練をして後一回の予備調査を経験した琉球大学家政学科の学生12人と筆者を加えた計14人である。

III　調査結果と考察

1）肌色と着用色　服色の選択における肌色の影響をみるために沖縄女性の肌色を3タイプ（ピンク系・オレンヂ系・イエロー系）に分けて，各群の着用色を彩度・明度・色相の面から考察することにした。

はじめに肌色と彩度（高彩度・中彩度・低彩度）の関係を x^2 検定によって捉えてみた。表1によるとオレンヂ系は中彩度の色を好み，低彩度の色を避けているが，他方ピンク系はそれとは逆の傾向を示している。イエロー系は，これといった傾向を示していないが多少ピンク系に近い傾向をみせている。なお全体としてみると肌色の如何にかかわらず中彩度色の着用が支配的である。

次に肌色のタイプと着用色の明度との関係を考察するために x^2 検定を適用した。その結果 x^2 の数値は 7.88 で 5% の有意水準に達しなかったが両者が無関係ではないということを示唆していた（$0.05<P<0.10$）。表2によると，ピンク系は高明度の色を好み中明度の色を避けている傾向を示している。オレンヂ系とイエロー系の着用傾向は類似していてピンク系とは対照的である。なお全体として肌色如何にかかわらず中明度の着用が支配的である。

今回の調査に着用率が高い茶・黒・灰・緑・青紫の5色をとりあげて肌色の3タイプとどのような関係があるかを x^2 検定した。検定の結果，x^2 の数値は 15.83 で有意であった（$0.02<P<0.05$）。

表1　肌色と彩度

彩度＼肌色	ピンク系	オレンジ系	イエロー系	
高	28 (25.43)	44 (45.27)	38 (39.28)	110
中	123 (138.5)	268 (246.56)	208 (213.92)	599
低	40 (27.05)	28 (48.15)	49 (41.78)	117
	191	340	295	826

$Df=4$
$x^2=19.68$
**

表2　肌色と明度

明度＼肌色	ピンク系	オレンジ系	イエロー系	
高	27 (18.36)	28 (32.3)	21 (25.33)	76
中	137 (151.24)	272 (266.05)	217 (208.64)	626
低	68 (62.33)	108 (109.65)	82 (85.99)	258
	232	408	320	960

$Df=4$
$x^2=7.88$
$0.05<P<0.10$

表3によると，ピンク系は緑をさけ灰を好み，イエロー系とは正反対の結果となっている。

着用率の低い色（赤紫・青緑・橙・白）と肌色とはどのような関係があるかをみるために x^2 検定を行なったが x^2 の数値は 10.73 で有意はみられなかった（$0.20<P<0.30$）。

肌色と着用色の考察を彩度・明度・色相の面からそれぞれ検討したが，肌色ともっとも密接な関連がある要因は彩度であることが明らかになった。表1から中彩度の着用数がもっとも高く，次に低彩度で，高彩度の着用はもっとも低い。高彩度すなわち純色が黄色人種，特にイエロー系・オレンヂ系に難しいといわれていることと，強烈な色すなわち鮮やかな色を着用するのに習慣づいていないことから今回の調査に一致した結果がみられた。また第2表から中明度の着用数が非常に高く低明度・高明度の順になっている。低明度・高明度の着用がイエロー系・オレンヂ系に低いことも沖縄の女性が肌色と類似した明度すなわち低明度や肌色に対比的な明度（高明度）の組合せは肌色を一層強調するということを理解しているものと思われる。併しながら濁色調の茶の着用が今回の調査で第一位を占めており，その着用率はピンク系に低く，イエロー系・オレンヂ系に高い。また純色や暗調の緑がピンク系よりもイエロー系に着用率が高くなっている。この結果から沖縄の女性が色相・明度・彩度の特性を総体的に理解して，どのような色が肌色を白くまたは黒っぽくみせるということを着装の場合

表 3 肌 色 と 色 相

色相＼肌色	ピンク系	オレンジ系	イエロー系	
茶	64 (68.75)	112 (112.20)	99 (94.18)	275
黒	37 (37.50)	68 (61.20)	45 (51.37)	150
灰	42 (31.50)	49 (51.40)	35 (43.15)	126
緑	8 (17.50)	31 (28.56)	31 (23.97)	70
青紫	39 (35.25)	51 (57.52)	51 (48.29)	141
	190	311	261	762

$Df=8$

$x^2=15.83$

*

表 4 体格と膨脹・収縮色

膨・収＼体格	痩 型	標準型	肥満型	
膨脹色	54 (43.89)	64 (66.37)	59 (66.37)	177
中性色	27 (29.01)	52 (43.87)	38 (43.87)	117
収縮色	51 (59.02)	84 (89.25)	103 (89.25)	238
	132	200	200	532

$Df=4$

$x^2=9.11$

$0.05<P<0.10$

に充分適合させているとはいえないということを筆者は本調査から確認することができた。

2）体格と着用色　体格と着用色の関係を検討するために，体格を3タイプ（痩型・標準型・肥満型）に，着用色を膨脹色・中性色・収縮色の3つに分類し x^2 検定を行なった。その結果 x^2 の数値は9.11で有意ではなかったが両者が無関係ではないということを示唆している（$0.05<P<0.10$）。表4から肥満型は収縮色，痩型は膨脹色の着用が高く，標準型は中性色を好んでいる傾向が示されている。なお，肥満型・標準型の体格が多く，収縮色の着用が全体的に高い。以上の結果から，体格を考慮して着用色を選択していることがわかる。

筆者はさらに上記の考察を確認するために「色相の面から暖色は膨脹性，寒色は収縮性をもつ」ということを基にして着用色を暖色・中性色・寒色に分類して，前記の体格の3タイプとの関係を x^2 法で検定した。x^2 の値は6.22で有意ではなかった。しかしながら，肥満型は寒色の着用が高く標準型は寒色の着用が低い。痩型については特記することはなかったが多少暖色の着用が期待頻数より高く全体的に予想と一致していた（表5参照）。

今回の調査で着用率の高い茶・黒・灰・青紫・緑の5色をとり挙げて体格のタイプによってそれらの色の着用率が違うかどうか x^2 検定で検討してみた。その結果，x^2 の値は8.66で有意水準に達しなかった（$0.30<P$）。表6によると，茶の着用は肥満型に高く，黒の着用は痩型に高い結果を示して

表5　体格と寒・暖色

寒・暖＼体格	痩　型	標準型	肥満型	
暖　色	52 (48.30)	77 (74.49)	65 (70.81)	194
中性色	42 (45.31)	79 (69.88)	61 (66.43)	182
寒　色	48 (48.05)	63 (74.11)	82 (70.44)	193
	142	219	208	569

$Df=4$
$x^2=6.22$
$0.10<P>0.20$

表6　体格と色相

色相＼体格	痩　型	標準型	肥満型	
茶	63 (70.98)	95 (98.28)	115 (101.01)	273
黒	47 (39.0)	62 (54.00)	41 (55.50)	150
灰	38 (32.76)	43 (45.36)	45 (46.62)	126
緑	20 (18.20)	27 (25.20)	23 (25.90)	70
青紫	35 (36.66)	47 (50.76)	59 (52.17)	141
	203	274	283	760

$Df=8$
$x^2=8.66$
$0.30<P<0.50$

いる。全般的に痩型と標準型は似かよった着用傾向となっている。

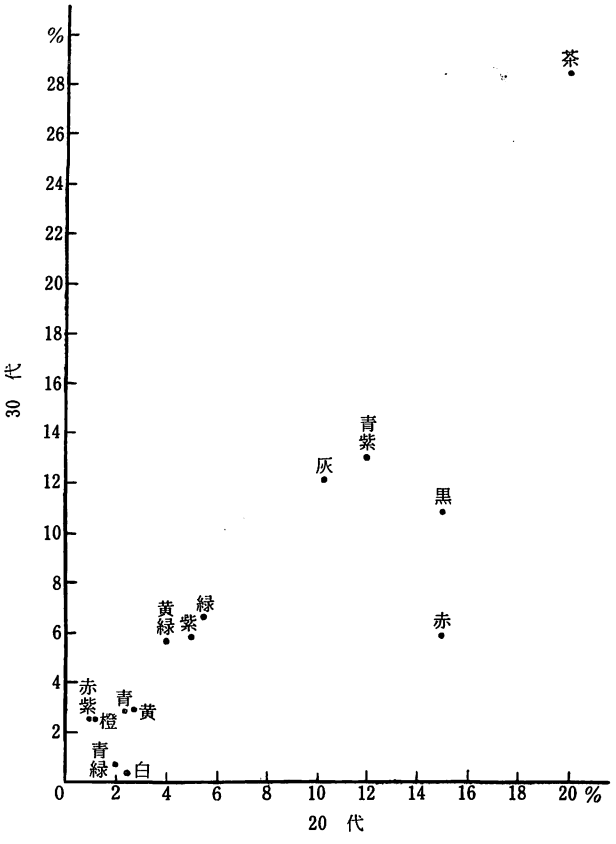
着用率の低い4色（赤紫・青緑・橙・白）をとり挙げて体格の3タイプと x^2 検定したが，その結果は x^2 の値が 9.09 で有意差がなかった（$0.20<P<0.30$）。

体格と着用色の考察から肥満型は収縮色，痩型は膨脹色（表 4・5）の着用が高くさらに表 6 から肥満型には茶の着用が高い結果となっている。しかしながらもっとも収縮性のある黒の着用が肥満型に低いという結果には矛盾がみられる。すなわち筆者らは沖縄の女性が色の膨脹性・収縮性を着衣の場合に充分に適合させているとはいえないと認めた。

3） 年代と着用色

A） 沖縄人の20代と30代の着用色　年代別の着用色の相関（第1図参照）は偏差積法によると 0.71 で相関が高い。青紫や灰は両年代の着用傾向が似ており茶・黒・赤は年代間の着用に差がみられた。茶は 8.5% 30 代が 20 代よりも着用率が高く，黒は 4.75%，赤は 5.35% それぞれ 20 代の着用率が高い。顕著な相違点は，暖色の着用率が 20 代に高く，青緑を除いた寒色・中性色の着用率が 30 代に高い。白と黒の着用率は 20 代に高く灰は 30 代に高い。30代の白の着用率は0.4%で着用色中でもっとも低い。また20代は30代よりも各色相を均等に着用している。両年代ともに着用率の高い色は茶・青紫・灰・黒で着用率の低い色は青緑・白・橙・赤紫・青・黄などである。

B） 米人の20代と30代の着用色　米人の年代別による相関は偏差積法によると0.915とな

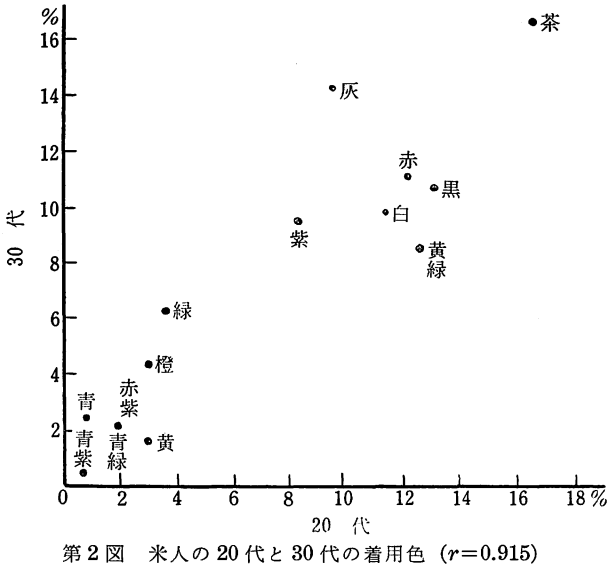


第1図　沖縄人の20代と30代の着用色（$r=0.71$）

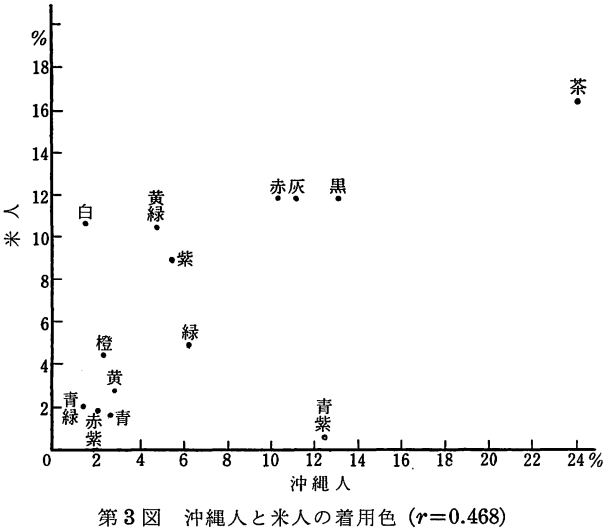
り沖縄人の年代相関よりも高い (第2図参照)。茶・赤・白・紫は両年代間の着用傾向が似ており灰・黄緑は年代差がみられる。灰は 4.7% 30 代に着用率が高く，黄緑は 4% 20 代が高い。寒色の着用は 30 代が高く暖色は両年代とも類似している。着用色全般に，両年代とも等質で，年代による着用色のギャップはみられない。20 代・30 代ともに着用率が 10% 以上出現した色は茶・赤・黒・白である。

4) 沖縄人と米人の着用色

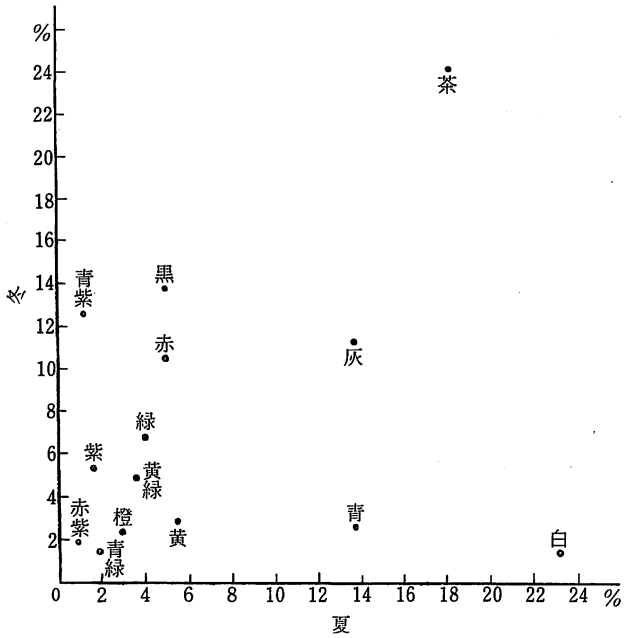
両年代を一括して沖縄人と米人の相関をみると 0.467 でやや低い (第3図参照)。灰・黒・赤が人種差のない色で赤紫・橙は人種差がみられる。米人は沖縄人よりも各色相を偏らずに着用している。沖縄人の着用率の高い色は茶・黒・青紫・灰・赤で米人は茶・黒・赤・灰・白の順位である。沖縄人・米人両方とも茶の着用率が第1位を占め，着用率がかなり高いことは，茶色が 1962 年冬季の流行色[5]



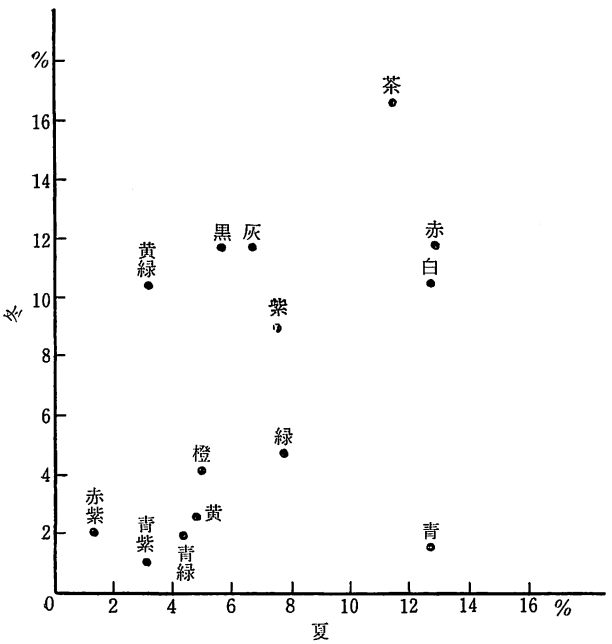
第2図　米人の 20 代と 30 代の着用色 (r=0.915)



第3図　沖縄人と米人の着用色 (r=0.468)



第４図　沖縄人の夏・冬の着用色（$r=0.257$）



第５図　米人の夏・冬の着用色（$r=0.438$）

の一つであった理由からくるものと思われる。

5) 夏季と冬季の着用色

A) 沖縄人の場合　季節による着用色は，1962年夏季の着用色と同年冬季の着用色との相関が 0.257 となってかなり低い（第4図参照）。白・青・黒・青紫・赤が季節弁別色になっており，白と青は夏季の着用率が目立って高いのに対し，黒・青紫・赤は冬季に着用率が高い。灰・茶は夏・冬とも着用率が 10% 以上で季節による変動がほとんどない。

B) 米人の場合　米人の両季節の相関は 0.438（第5図参照）で低いが，沖縄人の場合と比較すると季節による差が少いことがわかった。季節弁別色は青・黄緑・黒・灰・茶である。青は夏季に着用率が高く，黄緑・黒・灰・茶は冬季の着用率が高い。両季節とも着用率が高く，着用傾向が似ている色は赤・白・紫で，これらは季節による変動がない。

IV 結　　語

本研究は肌色・体格・年代・季節の違いによる着用色について検討することを目的に，20代・30代の街着を調査対象とし，ルイス・チェスキンの色円板を使用して行なった。偏差積法および x^2 検定による資料分析から次項の結果が得られた。

1) 沖縄人の肌色と着用色の関係を彩度・明度・着用率の高い5色・着用率の低い4色をそれぞれ肌色の3タイプと x^2 検定したが，彩度と，着用率の高い5色は有意差がみられた。特に彩度の有意差はもっとも高かった。

2) 沖縄人の体格と着用色の関係を a) 膨脹色・中性色・収縮色，b) 暖色・中性色・寒色，c) 着用率の高い5色　d) 着用率の低い4色をそれぞれ体格の3タイプと x^2 検定したが，いずれも有意差はみられなかった。しかしながら，体格と膨脹色・中性色・収縮色の検定で両者が無関係ではないことがわかった。

3) 年代間の比較で，20代と30代の着用色は沖縄人・米人両方とも相関が高く，米人は沖縄人よりも高い。年代によっても着用色の傾向が異るといわれているが今回の20代と30代間の着用色には大きな差はみられなかった。特に米人の場合はほとんど差のない結果を示している。

4) 沖縄在住の米人と沖縄人の着用色の相関はやや低い。茶・青紫・白・黄緑の着用率に人種差がみられる。

5) 季節によるすなわち夏季と冬季の着用色の相関は沖縄・米人両方とも低いが沖縄人の相関は米人より低い。沖縄人・米人両方にみられる季節弁別色は青と黒であった。

今回は調査対象を20代と30代に制限して，両年代間の着用色の比較，着用色とも肌色および体格の相関を検討したが今後は年代の幅をさらに広げて着用色の嗜好に関する研究を続行していきたい。

最後に，研究の資料分析に統計の御指導および原稿の御校閲を賜わりました本学教育学部助教授，東江平之先生に深謝致します。

参　考　文　献

1) 村田治子・比嘉美佐子 1963　家政学雑誌，**61**: 35-41.
2) Louis Cheskin 1953 Color Wheel for Color planning.
3) 細野尚志 1954　服飾の配色 117.
4) 中山光重 1961　最新医学，**16** (10): 2581.
5) 衣生活研究会 1962　衣生活，No. 58: 17.

Summary

In this study 693 American and 729 Okinawan women were surveyed during a 5 day period in December 1962. All of these women were in their twenties and thirties. The form used during the survey was revised from a previous study. All data has been analyzed by x^2 test and correlation methods. A summary of the methodology (M) is indicated below followed by the results (R) obtained.

1. (M) Three types of Okinawan skin color were analyzed in relation to color preference in clothing as to hue, value and intensity.
   (R) Intensity had the most statistically significant relationship to skin color. Brown, black, grey, green and blue-purple, colors highly preferred by Okinawan women, also showed a significant relationship between choice and skin color.
2. (M) Three types of Okinawan physique were examined in relation to color preference from the standpoint of advancing-receding, and warm-cool colors.
   (R) As the result of analysis, the advancing-receding colors revealed some relationship with the types of physique.
3. (R) Color preference between Okinawan and American women in their twenties and thirties was similar. Almost no difference in preference could be found between the ages of Americans.
4. (R) As a whole, some difference in color preference was found to exist between Americans and Okinawans. The most contrasting difference showed up in the preference or non-preference for brown, blue-purple, white and yellow-green.
5. (M) Data collected in a previous survey (summer, 1962) was compared with the result of this survey as to seasonal change affecting color preference.
   (R) Seasons have a considerable influence on the color preference of both American and Okinawan women, especially the latter. Both strongly preferred blue for summer only and black for winter.